

# 伊藤 ヒサ子(いとう・ひさこ)

## 1、プロフィール

歌人。昭和 10 年に短歌結社「樹氷」に入会し誌友。12 年に稲垣浩創刊の「美籠」に参加し師事する。後に「国原」になるも、長く同人として活躍。平成2年に「樹林」に入会する。

<生没>

1918(大正7)年7月27日 ~ 2013(平成25)年10月4日

<代表作>

『美籠よ』『童女の風景』

<青森との関わり>

大鰐町生まれ。青森県の歌誌「美籠」「国原」の同人、野辺地短歌会を結成代表としてつとめられ、後進の育成に尽力された。

## 2、作家解説

伊藤ヒサ子の短歌は、大正 12(1923)年の5歳のころ母の膝にいて、母が読み、取る百人一首の韻律を耳にきざみこむことから始まる。小学5年の時、川村富子の指導のもとに短歌を詠み始め、女学校在学時は近江谷はるの指導を受ける。昭和 10(1935)年に父を亡くし寂しがっていたヒサ子は、短歌結社「樹氷」に誌友として2年程在籍する。

昭和 12 年に稲垣浩創刊の短歌結社「美籠」に参加し、歌誌の編集は八戸市であったが、印刷は青森市で、当時青森県立病院の病理検査の助手として青森市在住のヒサ子が責任を持って任に当たる。その後太平洋戦争に突入し歌誌の発行は困難をきわめた。「美籠」は、戦後「国原」として再出発し、同人としてヒサ子は長く「国原」を支え続けたのである。

昭和 38 年より日本歌人クラブ会員になる。52 年に野辺地短歌愛好会を立ち上げ、59 年に野辺地町短歌教室を主宰、後に野辺地短歌会となり代表をつとめる。

しかし平成2(1990)年に中央の短歌結社「樹林」に入会し、しばらく「国原」と両方に作品を発表していたが、平成11年に60年余り支え続けてきた「国原」を退会する。

歌集『美籠よ』の序文「伊藤ヒサ子とその歌」の中で、佐藤政五郎は「この歌集の底を流れるのはその愛情と耐える力であり、それが年毎に太って行くのである。身近かのものは勿論、ゆかりの者、友、地域民、生物、自然、あらゆるものへの愛情が私共の心を捉えるのである。彼女は外部に向って高らかな声を上げる人柄ではない。が、歌集の隅々にまで及ぶ温かくやさしい思いやりが、瑞々しく清冽なひびきを立てながら、深い谷間の清水のように静かに流域をうるおしてくれるのである。それがこの歌集の生命である」と述べている。

青森県歌人功労賞、青森県芸術文化振興功労賞、野辺地町文化賞等を受賞し、青森県はじめ、地域の短歌の普及と後進の育成に尽力された。

### 3、資料紹介

○『美籠よ』

図書

1984(昭和59)年12月27日

215mm×135mm

10代から60代に至る50年余りの作品の中から厳選し、「孵卵器」から「坂道」の7部に構成し年代順にまとめた著者の第一歌集。著者の近影、直筆の色紙、佐藤政五郎の序文「伊藤ヒサ子とその歌」、あとがき、略歴を掲載している。